

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720061

研究課題名（和文） 近代化に伴う教育観・知識観の変容 - イラン伝統音楽を事例とした基礎的研究 -

研究課題名（英文）

Changing attitudes toward “teaching” and “learning”:
The Influence of the Modern Education on Iranian Music

研究代表者

谷 正人（TANI MASATO）

神戸学院大学 人文学部 講師

研究者番号：20449622

研究成果の概要（和文）：

本研究は、かつて徒弟制の中で実践されてきたイラン音楽の教育観や知識観が、五線譜や練習曲を用いる近代教育的観点の導入によって如何に変容したのかを考察したものである。

従来イランでは音楽は口頭で伝承されてきた。しかし『タール教本』（1921）のような教則本の登場によって、それまでのただひたすら師匠の模倣に専念するなかか自ら問いを立て学ぶというような徒弟制的教育に、より具体的で体系的な指導という近代教育的な知識の伝授段階をもたらされたことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：

This study discussed how attitudes toward “teaching” and “learning” in the practice of apprenticeship have been changed by the rise of a methodology using staff notation and études, together with the modern educational perspective inherent in it.

In Iran, music was traditionally passed on orally. With the introduction of western music, however, textbooks such as *Dastūr-e Tār* (1921), which appeared with the visualization of music, significantly changed traditional music pedagogy. This type of textbook initiated a new stage of knowledge transmission in modern educational sense which provided more specific, direct, and systematic instruction, within the traditional apprentice system in which each student raised questions and sought answers for himself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般、音楽学

キーワード：民族音楽学 イラン音楽 学習理論

1. 研究開始当初の背景

1906年の立憲革命以来のイラン社会における近代化は、伝統音楽の分野に西洋音楽の思考や教育手法を様々な形でもたらした（「五線譜」や「練習曲」概念の導入など）。本研究は、このような変化に否定的な立場をとる勢力 - とりわけ、1968年の「伝統音楽保存普及センター」設立に関わった勢力を中心的題材として、この「センター」が設立されるに至った経緯や、設立後どのような役割を果たしてきたのかを調査し、「五線譜」や「練習曲」に抵抗するという彼らの教育観や知識観を明らかにすることを目的として研究を開始した。

2. 研究の目的

しかし研究期間中に行われた大統領選挙の結果をめぐるイラン国内治安の悪化（およびビザ発給の困難さ）により、研究代表者は同研究のサブテーマであった、イラン国内における教育方法と国外のそれとの比較という方向性をも付け加えることとなった。例えば、アメリカ・カリフォルニア州のイラン人コミュニティにおいては、かつてイランで行われていたような、徒弟制的な知識観・教育観に基づく口頭伝承をベースとした教授法が一部実践されている一方で、近代教育的な知識観・教育観に基づいた、テキストや楽譜或いは映像を多用した教育が多数実践されている。

本研究は、このような多彩な教育方法に内在するイラン人音楽家たちの教育観や知識観を明らかにすることを目的とするものである。

3. 研究の方法

方法論としては、イラン音楽の教授法に内在する近代教育の知識観・教育観を、過去と現在という時間軸、そしてイラン国内と革命に伴って移住した音楽家が多く住むロザンゼルスなどのイラン人コミュニティなどとの比較という空間軸という両側面から比較検討し、その変容について近代化という観点から考察する。

4. 研究成果

本研究報告ではまず、イラン音楽の伝統的な学習の様子を報告し、それらがイランの教育全般とどのような類似性を持っているのかを考えてゆく。そして次に、音楽の近代化によって生じた教授法（学びのありかた）の変化を、それに反対した「イラン伝統音楽保存普及センター」という機関の理念も参照しながら考えてゆくことで、伝統的な音楽教授法のなかにそもそもいかなる教育観や知識観が通底していたのかを考えてゆくこととする。

1. イランの「暗記」型教育

イラン音楽には伝統的に、ラディーフ radif とよばれる旋律型群が音楽家たちの間で伝承されてきている。このラディーフは、グーシェ gūshe と呼ばれる比較的小単位の旋律型同士が時間的な一定の順序を構成するかたちで組織されている。伝統音楽の入門者は必ずこのラディーフを学ぶことから学習をスタートさせねばならない。つまりイラン音楽の学習の現場では、学ぶと

いうことはまず何よりも旋律型というテキストの暗記を指している。

そして実はこのようなありかたは音楽に限らず、広くイランの教育全体に見られるものでもある。イランの学校教育を研究している森田豊子が「イランでは、(中略)口頭で教科書の内容をすばやく言えること、それが小学校で育成される能力となっている」と指摘するように、イランにおいては、何かを学ぶことの中心的作業とはまず暗記であり、そして社会のあらゆる側面に、暗記した内容をそのままに活用できる機会が広く存在している。しかし、このように学ぶことの最終的な目的は、実際には暗記作業それ自体のみにあるわけでは必ずしもない。

2. 学びが変化するための要件 「場」からどのような作用を受けているのか

ここで、そもそもイランにおいて音楽の学習とはどのような形態で行われていたのかを考えてみよう。ここで思い起こされるのが、かつてイランにおいて実践されていたという徒弟制的な学びのありかたである。イラン伝統音楽の学習は、そのイロハを段階的に教えるのではなく、師匠の示す「形」だけをまず模倣すべしというような徒弟制的な教育システムの中で行なわれてきた(前述した旋律型の暗記作業がそれに相当する)。しかしそれは、「形」だけを覚えれば済むものではなく、師匠の生活を弟子が間近で観察できるという徒弟制でしかなかなか得ることができない「形の意味に対する気付き」こそが実は重要だという「学びの状況(文脈)依存性」を示している。

このことを前述の旋律型の暗記作業に置き換えるなら、師匠から覚えるよう指示さ

れた旋律型は、師匠の前で暗記作業のみを重ねるだけならば、それはいつまで経っても固定的なテキストでしかない。しかし伝承の場以外で他の音楽家の実践を見ることによって、学習者にはそうしたテキストを現前させているところの「連辞性 旋律型同士の関係性」が見えてくる。つまり実際の即興演奏を可能にする連辞的認識というものは、そうした、師匠の面前ではない、実際の即興演奏を実践している音楽家社会全体に対する着目によって獲得されるのである。

こうした徒弟制的な教育観や知識観についてはこれまでも、学校教育との違いからしばしば説明されてきた(生田 2001 など)。それは以下のように要約することができるだろう。ある知識を、その有用性(意義)や使い方というものも含めて、それだけを抽出して教えることができるという考え方に近代教育が立脚しているのに対し、徒弟制においては、ある「形」は伝授されるものの、それを具体的にどう(例えば即興演奏に)用いるのか、そして即興演奏に用いる上での意味そのものが教えられることは決してなく、それは伝授(暗記作業)以外の場で、師匠の或いは師匠が属する社会の実践を学習者が主体的に観察し盗むことによって個々人が獲得してゆくものとして捉えられる。つまりこのプロセスは、知識として個別に「取り上げ」られる(切り取り可能な)教授可能な「モノ」ではないということになるだろう。

しかし、音楽における近代化の影響とりわけ、五線譜の導入によって登場した『タール(楽器名)教本』(1921)などの教則本や、それに引き続く20世紀半ば以降の五線譜の定着は、このような学習のあり方を大きく変化させてゆくこととなる。例え

ばそこでは、五線譜による微分音表記・「練習曲」概念の導入・西洋風アレンジ・より弾きやすい楽器の構え方などの様々な工夫によって「学ぶべき(とされる)内容」が予め項目化(数値化)されており、それまでの、師匠の模倣に専念するなかから自ら問いを立てその答えを各自で模索するというような徒弟制的教育に、より具体(直接)的で体系的な指導という近代教育的な意味での知識の伝授段階をもたらすことになるのである。そこで次節からは、このような学びのあり方の変化を、それに反対した「イラン伝統音楽保存普及センター」という機関の理念も参照しながらより詳細に考えてみる。

3. 「イラン伝統音楽保存普及センター」設立とその理念

1906年の立憲革命以来のイラン社会における近代化は、伝統音楽の分野にも西洋音楽の思考や教育手法を様々な形でもたらした。例えば、本来口伝えであった音楽の伝授には五線譜が導入され、また伝統的な旋律型の伝承のみを目的としていた音楽の現場では、技術的な鍛錬を目的とした「練習曲」の概念が導入された。その一方で、そうした五線譜の使用を頑なに拒み、「練習曲」を「音楽の雰囲気破壊する」ものとしてその導入に否定的な立場をとる勢力は今なお存在している。そうした勢力の活動経緯を歴史的に追ってゆくと辿り着くのが、1968年に設立された「イラン伝統音楽保存普及センター Markaz-e Hefz o Eshā'e-ye Mūsīqī-ye Irānī」という機関の存在である。「センター」はイラン国営放送局の尽力によって、「近代化によって破壊されてしまった」「ペルシア音楽の正しい伝統」を「復興・再生」させるために創設された機関である

という。

当時のパハラヴィー政権下では、1979年のイスラム革命によって誕生した現在の体制とは異なり、脱イスラム化を図っていた親米派である国王の近代化政策によって、社会には西洋文化が満ち溢れていた。そうした社会環境のなかで「センター」が担っていた役割は、当時強い意味を持つものであったように思われる。柘植によれば同センターの設立は「伝統音楽の近代化・西洋化を、『純粹』なイラン古典音楽の伝統を『汚染』するものとして苦々しく思っていた知識人・音楽家の巻き返し」(柘植 2000 39)であり、「同時に、これは一時代前のユネスコ(およびその傘下にある国際音楽評議会[IMC])の東洋音楽の近代化に対する警告……安易で無定見な洋楽化(五線譜による教習、洋楽器やハーモニイの導入、楽器「改良」、大規模なオーケストラ化など)によって貴重な東洋の音楽遺産を消滅させないようにというIMCの勧告ともマッチした」(同 40 ページ)のものであった。結果として彼らの活動は「近代化の犠牲になった古典的なアーヴァーズ(引用者注:声楽)の復興、アクロバティックな技巧は持たないが地味で知的で奥深い音楽家に再び光を当て、こうした俗世から離れた神秘的な伝統音楽を復興させた」(ibid)とされている。

本研究が着目したいのは、上記のような理念を背景として持つ彼らが五線譜を用いたレッスンではなく、口頭伝承の方法で実技を教えていたということである。それはすなわち、そうした教育方法採用の背後にある「教えること」「学ぶこと」についての彼らの捉え方 すなわち知識観・教育観が、「五線譜」「練習曲」という方法論やそこに内在する近代教育の考え方を受け付けなかったということに他ならないだろう。

では、彼らは「五線譜」や「練習曲」の何に抵抗し、また何を守ろうとしたのだろうか。言い換えるなら、教習に五線譜が用いられることによって、前述のような「学びの状況（文脈）依存性」はどのような影響を受けるのだろうか。

4. 変容する「学びの状況（文脈）依存性」

イラン音楽が五線譜に書かれるようになってまもなく、前述した『タール教本』をはじめとした数々の教則本が登場するようになる。このことは、弟子が師匠と生活をともにするという状況から離れたところで知識が抽象化され、その伝授が可能になったことを意味する。しかし、ここで伝授される知識とは、個別の楽器の「奏法」に関する知識が主であることには留意せねばならないだろう。前述したように、学ぶべき内容としてそこで予め項目化されているのは、五線譜表記による微分音理解・練習曲による演奏技術の向上・西洋風アレンジ・より弾きやすい楽器の構え方などであり、即興演奏に必要な「連辞性 旋律型同士の関係性」に対する理解ではない。言うならばそれは、努力すべき内容が明示され、それによって得られる成果が予め数値化されているような学びのあり方であると言える。そこでは「何かを汲み取る」という「状況（文脈）依存的」なあり方よりもむしろ、楽器の奏法の伝授というより具体的・直接的な知識の伝授がむしろ前面に押し出されているのである。それは本来「旋律型同士の関係性」の体得を目的として行なわれていた音楽の伝授が、まずある楽器の奏法の指導からスタートするというような、質的に大きな変化を遂げていることを示しているのである。

このような学びの内実の変化は、前述の、

保守的な観点から「イラン音楽の破壊」として指摘されていた現象 西洋楽器や和声の導入、楽器の「改良」、大規模なオーケストラ化、器楽のヴィルトゥオーゾ化などに比べると見過ごされがちである。またそのように目につく現象も、西洋音楽や楽器の直接的な導入の結果としてのみ捉えられ、「センター」側の意図もそうした表面的・可視的な現象に対する抵抗としてより解釈されがちである。しかし実際にはそれらの現象も、伝統音楽の学びの内実の変化と深く結びついている。

例えば器楽のヴィルトゥオーゾ化は、「練習曲」概念の導入によって、本来「声」の模倣という側面を有していたイランの音楽が、楽器独自の技法の追求へと向かった結果であると言えるだろうし、また前述したような、学ぶべき内容が予め項目化されているために起こる「連辞性 旋律型同士の関係性」への気付きの「遅れ」や「後景化」は、連辞性に対する深い理解からのみ可能な即興演奏よりも、覚えた旋律型それ自体をモチーフにするような「作曲行為」というベクトルへと繋がってゆくだろう。そして更に言うなら、このような「即興から作曲へ」という流れとは、そこで示されるものの「新しさ」の意味が、「伝統的なものの再生産」から、作曲というかたちで人と違うものを提示するというような、より近代西洋的な価値観を帯びてくるような変化なのである。従って「センター」の抵抗とは、単に和声の導入や、大規模なオーケストラ化などの表面的かつ判りやすい現象それ自体に対してだけではなく、本質的にはむしろそうした価値観を生み出す学びのプロセスの変化に対するものだったとも考えられるのである。

今後の展望

研究初年度に起きた大統領選挙の結果をめぐるイラン国内治安の悪化（およびビザ発給の困難さ）により、もともとイラン国内を想定していた研究が、イラン国内における教育方法と国外のそれとの比較という方向に拡大することになったため、研究基盤の整備に時間を要した。

イラン国内の情勢は引き続き不安な要素があるため、今後の研究計画としてはイラン系移民の移住先であるアメリカを念頭に置き「変容する教育・伝統観 米国カリフォルニア州におけるイラン系移民の音楽実践に関する比較研究」というテーマでの研究を考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕(計2件)

発表者名 Masato TANI

発表表題 "The concept of improvisation in Iranian traditional music: the performer's mental state and memory when confronting the improvisational model"

学会等名

The British Forum for Ethnomusicology (BFE)

発表年月日 April 9, 2010

発表場所 Oxford, St. John's College, UK

発表者名 Masato TANI

発表表題 "Change in the Context for Learning Improvisation: The Influence of Modern Education on the Performance of Iranian Music."

学会等名 International Council for Traditional Music

発表年月日 2011年7月13日

発表場所 Memorial University of Newfoundland Canada

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 正人 (TANI MASATO)

神戸学院大学 人文学部 講師

研究者番号: 20449622